

〔論 文〕

オーストラリア児童文学の社会史

——19-20 世紀の展開を中心に——

藤 野 寛 之

I はじめに

本研究は、児童文学作品の社会史とも言うべきものであり、オーストラリアをテーマとする。個々の作品の文学的内容ではなく、社会のなかでどのような種類の作品がどのような要請のもとに出現するかを考察するものである。フランスの文学史家ポール・アザール (Paul Hazard, 1878-1944) は「イギリスほどみごとに、子どもの本のなかに不滅の国民性をきざみこんだ国はない」と述べた¹⁾が、イギリスはともかく、オーストラリアの場合には、確かに、児童向けの作品からこの国の国民性ならびに社会の姿を読み取ることができる。それは、国としては歴史が浅く、変遷の特徴が凝縮されて作品に表れ、短い期間にその傾向が伝達されていった様相が見えるからである。

端的に言うなら、19世紀後半に本格的に始まったこの国の児童読物は、19世紀末から20世紀前半にかけ、二人の作家の作品シリーズを生んだ。ただしそれらは、イギリスの読者の嗜好に合わせたものであって、イギリスの出版社から刊行されていた。1929年から始まる世界大恐慌の余波はこの国全土へとおよび、大量の失業者が街にあふれた。1931年に独立国家として認められたこの国は、第二次世界大戦時には国民の意識の結束を見ていた。「オーストラリア児童図書賞 (Australian Children's Book Awards)」が発足したのは1946年である。

イギリス主導の作品傾向に反発し、オーストラリア人独自の作品がしだいに刊行されるようになったのは第二次世界大戦後であったが、それでも、出版は依然としてイギリス系の

出版社が主であった。オーストラリアの出版社アンガス・アンド・ロバートソン (Angus & Robertson) が本格的に活動を開始したのは1970年代以降であった。戦後経済の活性化から白豪主義を放棄し、アジア諸国からの移民を歓迎したことにより、児童文学作家も挿絵画家も多様な傾向の作品をもたらした。その流れを受け、オーストラリア人作家の作品は国際的な賞を受賞するまでとなった。この国の児童文学は、国際的な環境のなかで、今後さらに重要な役割を占めるようになるであろう。

これまで児童文学については、個々の作家・作品を取りあげた研究が主流であったものの、一国の文学の変遷の系譜を視野に入れることで、児童文学の本質を新たに把握できるようになるかもしれない。そこには成人向けの文学作品とは異なり、主人公の深層心理の描写や行動の動機に対する考察はどちらかといえば少なく、外的社会への反応が端的に表現されることが多い。「ブッシュ」や「アボリジニ」に対する認識も「調和」や「保護」へと変わっていった。アボリジニの作家や画家も登場した。個別の作品だけでなく、作品群としての児童文学は図書館におけるこのジャンルの資料への理解に必要なものとなっている。

児童文学は、オーストラリア文学のなかでごくわずかな割合を占めるにすぎなかったが、このジャンルを文学史のなかに位置付けようとの意図で編纂された、1988年刊行の『新オーストラリア文章史』(ペンギン出版、ローリー・ハーゲンハン編集主幹)には「児童文学」に関する一章(ブレンダ・ニアル執筆)がある。この執筆者はその時すでに『覗き眼鏡を通したオーストラ

リア』(1984)を刊行している。絵本についてはマーシー・ミュアの『オーストラリア児童図書挿絵の歴史』(1982)が出ている。本稿は、これら先行研究を含め実際の作品も参考に論旨を跡づけている。

Ⅱ 魅惑の大陸 1830-1880年代

1770年にクック船長(James Cook, 1728-1779)がオーストラリアに上陸した。ここは、アメリカの独立により流刑植民地を失ったイギリスが、1788年にオーストラリア東部海岸で新たな流刑植民地を形成、囚人をここに送りこんだことで発足していた。イギリス市民の移住により、東部沿岸の白人による植民地は次第に拡大された。それとともに先住民は奥地に追いやられた。1851年に金鉱が発見されると、世界中から移民が殺到して人口は急速に増えた。中国人の急増を危機と受けとめたオーストラリアはその排斥を図り、1901年には6植民地州がイギリスから独立してオーストラリア連邦を結成する。こうした歴史上の事実はすでに良く知られているが、20世紀の半ばまで、この国は世界に残された未開拓の秘境の一つであり、探検家の活躍するエキゾチックな土地であって、若者向けの読物に登場する恰好な舞台であった。

オーストラリアを舞台にした初期の小説は、1830年に刊行された『アルフレッド・ダドリー』あるいは、オーストラリアの移民たち(*Alfred Dudley or The Australian Settlers*)』であった。作者は匿名であったが、経済学者デヴィッド・リカード(David Ricardo, 1772-1823)の妹のサラ・ポーター夫人とされている。小説は典型的な「オーストラリアに行けば成功する」ことをテーマとした初期の作品であった。イングランドで富裕な商人の末裔であったダドリー一家の父は、信頼したパートナーに裏切られ、資産を失い、フランスに移って貧苦の生活を送るうち、「輝かしき将来性のある」オーストラリアで「一旗」あげることを考えついた。息子のアルフレッドを伴い、父は一家を残して船旅に出

た。シドニーに到着したアルフレッドが見たものは、鎖につながれた囚人と常に酔っ払っている市民たちであった。ダドリー父子は郊外での農場の開拓に精を出し、邸宅を築いた。一家の女性たちをよび寄せたダドリー父子は、教会を建て、イングランドから司祭を呼び寄せ、土地の住民を教育するための学校を開設した。作者は、オーストラリアの事情を知っていたわけではなく、土地の風物についての描写はほとんどなかった。結局、著者が言いたかったのは、努力すればこの土地で成功できるという神話の裏付けであった。『アルフレッド・ダドリー』がその後の同類の小説と異なっていたのは、土地の「アボリジニ」の女性を雇い入れ、彼女との人間関係を尊重していた点であった。

ジョージ・サージェント(George E. Sargent, 1808?-1883)の『フランク・レイトン：オーストラリアの物語(*Frank Layton: a Tale of Australian Life*)』(1865)は、『アルフレッド・ダドリー』と同系統の出世小説であったが、この主人公の出自は田舎の地主であり、フランクはオーストラリアに向かった。すでに「ゴールド・ラッシュ」の時代であり、カンガルーやエミューが先住民とともに奥地に追いやられていた状況のなかでの財産作りであって、イギリス人の有利さは保証されていた。著者はオーストラリアに行っていないに等しく、鉱山での仕事と仲間の描写以外は正確さを欠いていた。作品には開拓者として同地に住んだ仲間が森のなかで殺害されている情景も取りあげられていた。宗教冊子協会(Religious Tract Society)から刊行されていたこの小説の末尾では、作りあげた財産で教会を建て、住民への布教を確信した主人公の姿が描かれていた。

『フランク・レイトン』と同じ年に刊行された『ギルピン一家の幸運(*The Gilpins and Their Fortunes*)』(1865)は、児童向けの作家としてすでに知られており、ジュール・ヴェルヌ(Jules Verne, 1828-1905)の翻訳者でもあったウィリアム・キングストン(William Henry Giles Kingston, 1814-1880)により執筆されて

いた。この作者もオーストラリアには滞在していない。とはいえ、熟達の手書きであるキングストンのブッシュの火事の描写などは真に迫っていた。同著者が次いでオーストラリアを取りあげた小説『ミリセント・コートニーの日記 (*Milicent Courtney's Diary*)』(1873) は、女性主人公を扱った点で他の作品とは異なっていた。エキゾチックな異国での家庭生活は、動物の描写にしても、召使＝アボリジニへの対応にしても、女性らしい心遣いが表れており、毎日の自然との闘争に疲れて家を捨てた父親の姿も描かれていた。とはいえ、キリスト教徒としての視点は変わっていなかった。オーストラリアを舞台にしたキングストンの次作『若者ベリントン兄弟 (*The Young Berringtons*)』(1880) は、前作と同様にこの地では「努力」のみが報いられるとの主張が主題であったものの、7人のベリントン兄弟が一人、二人と死に至る経緯も記されている。イギリスの読者とともにオーストラリアの若者をも読み手として意識していたのは、この本が「オーストラリア部門」を新設したカッセル出版 (Cassell & Co.) から刊行されていたことから知る事ができる。

『若き日の出発 (*The Early Start in Life*)』(1867) を執筆したエミリア・マリアット・ノリス (Emillia Marryat Norris, 1835-1875) は、オーストラリアこそ取りあげなかったが、ヴィクトリア朝のイギリスで海洋ならびに未開地の冒険小説で知られたフレデリック・マリアット (Frederick Marryat, 1792-1848) の娘であった。父親の小説『海軍士官イージー (*Mr. Midshipman Easy*)』(1836) はキングストンに大きな影響を与えていたとされる。『若き日の出発』の主人公の若き女性は、家庭生活をオーストラリアの現実生活に適應させるためのさまざまな努力を重ね、その描写が小説の魅力となっており、キリスト教徒の信念は失わなかったものの、「素直ではあるが、愚かな」先住民の一人は差別的な用語で呼ばれていた²⁾。

『若きランバート (*The Young Lamberts*)』(1878) を書いた、フレデリック・マリアットの

姪にあたるオーガスタ・マリアット (Augusta Marryat, ?-1913) は、現地に移り住んだ初期の作家であった。南オーストラリア州の総督の妻であったオーガスタは、オーストラリアの実情を見つめていた。近郊都市であるシドニーは、すでに先行の小説に書かれたような「薄汚い」町ではなくなっていた。主人公の少年ジョージ・ランバートの努力はすぐに報われることにはならなかった。とはいえ、結局はハッピーエンドの小説であり、キリスト教徒の正義は生きていた。

オーストラリアに対する読者の見方を変えたのは、W・ティンパリー (William Timperley, 1833-1909) の小説『ブッシュの幸運 (*Bush Luck*)』(1892) であった。西オーストラリアの警視であった作者は、イギリスの「移民者」の成功物語を執筆するため、落ちぶれた無一文の主人公ヒュー・ソーナーリーをイギリスから出航させ、さまざまな努力の末に、最後には財産を手にして報われる1880年代を描いていたが、舞台は「ゴールド・ラッシュ」とは関係のない土地柄で、極端に貧しい先住民と対等に付き合えなかった。最初は彼らを信用していなかったソーナーリーの道德観も次第に浸食されていった。彼はキリスト教徒ではあったが「宣教師」ではなかった。イギリスのモラルを法的に遵守こそすれ、そこに精神的な負い目は感じなくなっていた。こうして、オーストラリアを扱ったイギリス人の小説もわずかながら変化していた。こうした作品が若者に訴えたのは、困難な旅と新天地での苦闘、および、結果としての安泰の獲得であった。19世紀の後半には、少年少女向けの物語にさらに三つの要素が加わっていた。未知の大陸の珍しい動物や植物と自然環境であり、キリスト教の伝道の栄光であり、未開の土地での生活であった。

サラ・リー (Sarah Lee, 1791-1856) の『オーストラリアの冒険 (*Adventures in Australia*)』(1851)、および、アン・パウマン (Anne Bowman) の『カンガルー狩り (*The Kangaroo Hunters*)』(1858) は、いずれも「ロビンソンク

ルーソー物語」とも言える作品であった。前者は、西部海岸で難破した船の船長が独力で大陸を横断し、東海岸にたどりつく物語であり、この時代にそれが可能であったかどうかは別として、エキゾチックな自然のなかでの主人公の旅が描かれていた。後者も、難破した牧師の一家が西海岸から東海岸にたどりつくまでに遭遇する猛獣や先住民との対決から生きのびる話であった。ジャーナリストとしてシドニーに滞在したリチャード・ロー (Richard Rowe, 1828-1879) の『ブッシュの少年 (*The Boy in the Bush*)』(1869) も開拓者ではなく、旅する少年が主人公であった。オーストラリアへの渡航も、さまざまな姿で小説に描かれている。グレイス・ステビング (Grace Stebbings) の『エドワード・バートラム (*Edward Bertram*)』(1882) では、家庭で虐待され、学校でもいじめられていた少年が密航した船は囚人船であった。

開拓時代のオーストラリアは、キリスト教宣教活動の恰好な舞台であり、ヴィクトリア朝の宗教冊子協会にとってはこのうえない本の題材でもあった。ここは開けた土地柄が広がる、宣教師にとって説得力のある場所と場面であった。改宗すべき人が数多く、懺悔を乞う囚人たちもいたのである。ヘスバ・ストレットン (Hesba Stretton, 1832-1911) の『エノック・ローデンの試練 (*Enoch Roden's Training*)』(1865) を皮切りに、多数の本を宗教冊子協会がスポンサーとなって刊行した。ストレットンの本は、イングランドからオーストラリアに渡航した、対照的な性格の兄弟のうち、信仰の厚い兄が生き残る話であった。『藪地の少年たち (*The Children in the Scrub*)』(1878) でソフィア・タンデイ (Sophia Tandy) は、タスマニアで先住民をキリスト教徒に改宗させる話を取りあげていた。この土地では、実際に先住民と開拓者イギリス人との対立が激化し、ついには先住民が追いやられる状況が進行していたのである。キリスト教の信仰が勝利する物語は1880年代まで続き、エマ・ピトマン (Emma Pitman) の『フローレンス・ゴドフレイの信心 (*Florence*

Godfrey's Faith)』(1882)、アレクサンダー・フレイザー (Alexander Fraser, 1802-1888) の『クリプスおじさんの拾いもの (*Daddy Crips' Waifs*)』(1886) が刊行されていた。

児童向けの情報提供のための同時期のノンフィクション作品も取りあげておく価値がある。シャーロット・バートン (Charlotte Barton, 1797-1862) の『母の贈り物 (*A Mother's Ordering to her Children*)』(1841) はシドニー在住である著者の日常の生活の知恵を小話に仕立てたものであった。ルイザ・メレディス (Louisa Meredith, 1812-1895) の『タスマニアの味方と敵 (*Tasmanian Friends and Foes*)』(1880) は大判の絵本で、タスマニアの動物の子ども向け案内書として有益であるが、ここで「敵」と見なしているのは、食用にカンガルーを殺すアボリジニのことであった。

Ⅲ 過渡期 1880-1945年代

19世紀後期のオーストラリアでは、冒険小説や布教物語は、イギリスの子どもたちを読者として意識していた。しかし、1880年代以降、状況は変化してきた。移民の流入により都市は大型化し、家庭生活が定着し、辺境のフロンティアが姿を消しつつあって、こうした時期のオーストラリアの子どもたちが読者となっていたからである。とはいえ、出版社の編集者たちは、いまだイギリスやアメリカの児童文学を手本として考えており、そのオーストラリア版を作ることに熱心であった。オルコット (Louisa May Alcott, 1832-1888) の『若草物語』、バーネット (Frances Hodgson Burnett, 1849-1924) の『小公子』は、この地でも読まれ、本国と同様、児童文学の黄金時代を画していた。

1880年代後半から出現してきた作品では、依然として移民の家族が扱われてはいても、はっきりと子どもが主人公と位置づけられていた。ベンジャミン・ファージョン (Benjamin Farjeon, 1838-1903) の『黄金の土地 (*The Golden Land*)』(1886) は、移民一家の家庭生活

を描いており、父が子どもたちに語るオーストラリアの話であって、後に主にイギリスで活躍する児童作家エリナー・ファージョン (Eleanor Farjeon, 1881-1965) がその聞き手であった。J・ホジェッツ (James Hodgetts, 1828-1906) の『トムの宝物 (Tom's Nugget)』(1888) は、二人の少年がカモノハシを探し求めるストーリーであり、E・ストレッダー (Eleanor Stredder) の『アーチャーの発見 (Archie's Find)』(1890) も E・クリーランド (Elphinstone Cleland) の『白いカンガルー (The White Kangaroo)』(1890) も少年たち自身の冒険物語であった。

1890年代半ばより第二次世界大戦が終わる1945年までは、二人の児童小説作家エセル・ターナー (Ethel Turner, 1870-1958) とメアリー・ブルース (Mary Bruce, 1878-1958) の時代であったと言うことができよう。すなわち、1894年にターナーの『七人のオーストラリアの子どもたち (Seven Little Australians)』から1942年のブルースの『ビラボン・ライダー (Billabong Riders)』が出るまでに、総計83冊の作品³⁾ がほぼ毎年にならってこの二人により刊行されていたばかりでなく、それらはオーストラリアの現実を描いた代表的な児童文学と見なせるからであった。ターナーはこの期間の前半を、ブルースはその後半を受け持っていた。

エセル・ターナーは、1880年に母とともにオーストラリアに移住し、シドニー郊外に住んだ。ターナーの初期の作品は自伝的な要素が強く、ヨークシャーで生まれたエセルが2歳で父を亡くし、ヘンリー・ターナー (Henry Turner) と再婚した母がさらにこの夫と死別し、娘たちとともにオーストラリアに移住して、結婚して家庭を築いた次第が語られている。シドニーの文芸雑誌『ブレイティン (Bulletin)』の編集者A・スティーヴンス (A. Stephens) に認められ、当地に支社を構えるウォード・ロック社 (Ward Lock & Co.) の編集長も彼女の作品に興味を持った。1900年に刊行した『三人の娘たち (Three Little Maids)』で、ターナーが描いたのはオーストラリアの家

庭であって、描かれたのは、これまでの作品のように未開の自然やそこでの冒険ではなく、シドニーに定着し始めたブルーカラーの一家の都会生活における子どもたちであった。父親を異にする三人の少女たちの生活が取りあげられ、一家とともにシドニーに上陸した三人の感想は「失望」であった。そこに立ち並ぶ家々は、イングリッドと変わりはなく、期待したような、カンガルーの飛び跳ねる緑の草原はなかった。しかし、そこには連邦が形成される時期の「新しいオーストラリア」が見えていた。金鉱探しの熱気はすでになく、イギリスの読者たちもシドニーにロマンスを求めていた。この作品は子どもの死を信仰上の受容すべき出来事と見るヴィクトリア朝のモラルとは異なる、オーストラリア版『若草物語』とも言える作品となっていた。この自伝的作品を書いた時のターナーは30歳であった。

1880年、母に連れられて三人姉妹とともにシドニーに渡ったターナーは、姉とともに雑誌『パルテノン (Parthenon)』の発行を始めた。初期のペンネームは「プリンセス・イーダ」(テニソンの詩より) であり、高貴で貞淑な女性のこのイメージが受け入れられていた。雑誌が3年で廃刊になると、エセルは家庭教師の職を探しながら執筆を続けた。シドニー大学の法学部学生ハーバート・カールイス (Herbert Curlewis) が彼女に求婚したが断られていた。理由は、義理の父が学生身分の相手を認めなかったからである。ロンドンの出版社ウォード・ロック社メルボルン支店のウォルター・ジェフリー (Walter Jeffrey) に最初の作品が認められたのは1893年であった。『七人のオーストラリアの子どもたち』は初刷りの5000部がオーストラリアだけで売り切れ、再販はロンドンで刊行された。出版社はすぐに続編を書くよう依頼した。1895年に『ある赤ちゃんの物語 (The Story of a Baby)』で成功したこの作家は、若くしてすでに財を成していた。1896年4月にいまや弁護士として出世したカールイスと結婚した彼女は、1901年までに二人の子どもの母となっていたが、名前を

変えずに児童小説を書き続けた。保守的なオーストラリアの上流家庭ではむしろ異例であった。それから1928年の作品『ジュディとパンチ (*Judy and Punch*)』まで、彼女はほぼ毎年、新作を刊行し、さらに内外の雑誌に多数の短編を寄稿していた。イギリスとヨーロッパの没落をよそに、オーストラリアが希望に満ちた未来図を持ち合わせていたこの時期に、ターナーは幸運に恵まれていた。1898年に書いた短編『子どもたちの子ども (*The Child of the Children*)』は、その物語と主役の名前が後に刊行されたバーナード・ショー (George Bernard Shaw, 1856-1950) の『ピグマリオン』(1912) に類似しており⁴⁾、さらに後者が1950年代にミュージカル「マイ・フェア・レディ」になると、新聞には「バーナード・ショーはイライザを盗んだのか」との記事が出た⁵⁾ほどで、これも彼女の名声を支えていた。事実、ターナーの物語の主人公はイライザ・ハギンス (Eliza Huggins) であった(「マイ・フェア・レディ」に登場するのはイライザ (Eliza) とヒギンズ (Higgins))。第一次世界大戦が終わる1910年代の末まで、彼女の小説は売れ続け、オーストラリアも繁栄の方向をたどっていた。娘のジーンは母親の後を継いで児童小説の作家となっており、息子のアドリアンは父親の後を継いで判事となっていた。しかし、ターナーは1920年代後半から次第に作品を発表しなくなった。1923年に結婚してイギリスに渡った娘はその作品が不評であったし、自身の作品もメアリー・ブルースのものほど売れなくなっていた。エセル・ターナーは1928年、44冊目の作品を刊行した後に筆を絶ったが、その後の生涯は不幸の連続であり、第二次世界大戦中には息子が日本軍の捕虜となり、チャンギの強制収容所で亡くなり、夫も1942年に死去していた。1958年4月にシドニー湾を望むモスマンで亡くなった時には88歳であった。

同じく1940年代までに36冊の小説を刊行し、もう一人の人気作家となっていたメアリー・ブルースは、エセル・ターナーとは8歳しか違わなかったが、まったく異なる生涯と時代を歩

み、異質の作品群により同じくベストセラー作家となっていた。ブルースは1878年5月24日にオーストラリアのヴィクトリア州セイルで生まれた。アイルランドのコークで生まれた父親は州政府の役人となっていた。母親は初期の移民の開拓者の娘であった。メアリーは幼少時代の多くを母方の大農場で過ごした。兄弟姉妹は多かったが、6歳の時、常に行動をともしにしていたすぐ上の兄パディーが銃の暴発事故で亡くなり、メアリーは内省的な少女となった。17歳でメルボルン大学に入学し、シェークスピア協会に所属して文学を学んだ。卒業後、小学校の補助教員として働き、週給1ポンドの生活を続けた。最初の短編が雑誌に発表されたのは1898年であったが、その後に書き続けたオーストラリアの大農場の子どもたちの冒険と日常生活の記録は、当時の若い読者たちの夢を育んだ上、感銘を与え、1910年に刊行した『ブッシュの少女 (*A Little Bush Maid*)』の主人公ノラはブルースの出世作となっただけでなく、自然のなかで伸び伸びと生きる子どもを描いたオーストラリアの児童文学の傑作として評価された。

続いて「ビラボン」農場のシリーズが刊行された。「ビラボン」シリーズは1920年代まで売れ続け(各冊の販売はすべて2万部を越えていた)、その後、中断したが、1930年代の不況時には再びシリーズを続刊して家計を助けるまでとなっていた。このシリーズが成功したのは、未開の大陸の開拓が市民に興奮をもたらせていたからである。ブルースはさらに1920年代、若者向けの戦争小説で名をあげていたが、それは第一次世界大戦勃発直前の1914年に結婚した相手からの影響によっていた。メアリーと同姓の少佐メジャー・ブルース (Major Bruce) はアイルランド生まれのはとこであった。すでにインドに駐在し、ボーア戦争で殊勲をあげ、軍人としては成功していたが、ダブリンのトリニティ・カレッジ出のインテリであった彼は、アイルランドの民族主義者でもあり、妻はその影響を受けていた。夫とともにアイルランドとフランスの駐在地で4年を暮らしたメアリー・ブ

ルースは、オーストラリアの「アンザック」軍団の勇敢さを若者の主人公により伝える小説を書いて、それがオーストラリアの読者を引きつけていた。1920年代はブルースの小説にとって最高の時期であったが、家庭的には、夫の引退、および、不幸な死をとげた兄の名前にちなんで名付けた次男のパトリックも12歳に事故に遭って死亡していた。第二次世界大戦中は、ヴィクトリア州のクロイドンに住んだが、1949年に夫と死別すると、隠遁の生活を続け、1954年に出版社に招かれてイングランドに渡り、サセックス州で病に倒れ亡くなった。

エセル・ターナーが描いたシドニーの市民生活、および、メアリー・ブルースが描いた郊外の生活は、ともに、20世紀前半のオーストラリアを代表する児童小説として読者層を獲得しており、前述のとおり1894年より1942年までに二人で総計83冊の作品を刊行していた。二人はともに1958年に亡くなったが、いずれも不幸な晩年のため、ターナーは1928年以後、ブルースは1942年以降、一冊も刊行しなかった。二人に追従した作家の作品は、そのほとんどが成功しなかった。1918年に書かれたノーマン・リンゼイ (Norman Lindsay) の『まほうのプディング (The Magic Pudding)』は評判となったが、それは、オーストラリア的な主題というよりも、画家としての作者の絵とコミカルな筋立てによっていた。

IV 離陸 1945-1980年代

第二次世界大戦の苦難の時期を勝ち抜いたオーストラリアの戦後児童文学の世界に出現したのは、自然を見つめなおそうとの機運であり、それを支えていたのは新たに押し寄せる移民の波であった。もともと、歴史の新しいオーストラリアの文学ではジャンルを問わず、自然を見いだす点では差はなかった。

戦後の出版界にまず登場したのは、1900年生まれで、戦後にオーストラリアに新天地を求めて外国から移住してきた移民たちとの新たな体

験であった。戦前にも一家とともにタスマニアで生活を始め、失敗して帰国したが、再び夫とともにタスマニアにやって来て定住したナン・チョーンシー (Nan Chauncy, 1900-1970) は、1950年代から本格的にこの南の島での自然と向き合う生活を記録し始めた。主人公は少年少女である。『わが家は世界の果て (World's End was Home)』(1952) はそこでの若者の発見の物語であるが、作者は、過酷な自然と西欧の文明からの圧迫により追いやられていった島の先住民アボリジニの歴史の発掘をも手がけることになる。その最終的な報告が小説『マティンナの人たち (Mathinna's People)』(1967) であった。チョーンシーの本を発見してそれを世に送ったのは、オックスフォード大学出版会 (Oxford University Press) であり、同じイギリスの出版社とはいえ、それまでにターナーやブルースの本を独占出版してきたワード・ロック社の時代は去っていた。

オーストラリアで馬の飼育員を一生の仕事とし、厳しい奥地の生活を舞台に作品を書いたレジナルド・オトリリー (Reginald Ottley, 1909-1985) も夢見がちな少年であった。灼熱の土地での野性の馬とのつきあいは、若者を熱中させるに足り、読者を魅了するに足るテーマであり、これも新たなオーストラリアの発見であった。オーストラリア大陸の荒涼とした赤土の大地の各地を旅してまわったメイヴィス・ソーブ・クラーク (Mavis Thorp Clark, 1909-1999) はスコットランドからの移住者の娘であった。砂漠横断鉄道の人里離れたキャンプ地で生活したさまを取りあげた代表作『ミン・ミン (Min-Min)』(1966) には正確な自然の描写と生活の苦闘とが描かれていた。青少年向けの小説が多いのもこの時期までのオーストラリア児童文学の特徴であった。

オーストラリア児童図書賞が始まったのは1946年からであったものの、当初はニューサウスウェールズ州だけのものであり、オーストラリア全州の協議会組織が参加しての授賞は1958年からであった⁶⁾ のも、それまではシド

ニーのイギリス系出版社が中心的存在であり、ようやくその後にはオーストラリア系の出版社による出版が本格化していった事情を示していた。ちなみに、1958年、1959年、1961年の受賞者はチョーンシーであった。

アボリジニの「精霊伝説」から「ファンタジー」を作りだした、1921年生まれのパトリシア・ライトソン (Patricia Wrightson, 1921-2010) は、新たな時代のオーストラリアの青少年文学の先導者であった。彼女は開拓時代のオーストラリアの探究を志し、幾多の伝説に出合う。1955年に書いた『ヘビ・クラブ (*The Crooked Snake*)』はオーストラリア児童図書賞を獲得した。1960年代から1970年代にかけ、四度にわたりオーストラリア児童図書賞を受賞していた⁷⁾ アイヴァン・サウスオール (Ivan Southall, 1921-2008) も、ライトソンと同じく1921年にオーストラリアで生まれていた。第二次世界大戦中に軍隊にいたサウスオールは、戦後に作品を発表し始めたが、その物語の迫力で若者を引きつけ、ベストセラー作家となっていた。『燃えるアッシュ・ロード (*Ash Road*)』(1965)での森林の火事はその見事な例であろう。孤島での少年たちの「サバイバル・ゲーム」なども取りあげていた。「魔少女」や「ぼんやり者ウォンバッド」を1960年代から20年にわたって主人公とした、ニュージーランド生まれのルース・パーク (Ruth Park, 1917-2010) は、自身の子どもの観察から、子どもの世界に踏みこんだ物語で子どもたちの共感を得ていた。これもまたオーストラリアでは新たなジャンルとなっていた。ロンドンから世界を放浪したヴィクター・ケラハー (Victor Kelleher, 1939-) は、オーストラリアに定住してからアボリジニの「精霊伝説」に魅せられ、トールキン (John Ronald Reuel Tolkien, 1892-1973) に比較されるような「ファンタジー」を作りあげた。『デル・デル (*Del-Del*)』(1991)には悪夢を背負う少年が描かれている。これに対して、スコットランド生まれのオーストラリア人政治家アラン・ベイリー (Allan Baillie, 1943-) は、ジャーナリストとして中国の天安

門事件やカンボジアの戦場を取材した末にオーストラリアに帰着し「自分の民族について伝えること」を考えた。ベイリーはアボリジニの居住区に住み、アボリジニの青年を主人公とした小説『ソングマン (*Songman*)』(1994)を書いた。このように、過去とも向き合うような作品も刊行されるようになった。

V 新たな挑戦 1980年代以降

オーストラリアの児童文学にも、こうして、いくつかの変化の節目があったが、1980年代以降にはさらに新たな時期を迎えていた。それについて述べる前に、児童文学固有の挿絵について解説しておこう。

オーストラリアの挿絵入り図書の歴史は、前述したマーシー・ミュー (Marcie Muir, 1919-2007) の『オーストラリア児童図書挿絵の歴史』(1982)に絵入りで詳しく解説されているが、その変遷は青少年向けの作品の歴史と軌を一にしていた。挿絵入りの初期の児童図書に、1861年に刊行されたドイツ語の『クック船長の三度の旅 (*Des Englischen Kapitäns Kook Berühmte Drei Reisen um die Welt*)』があって、船長は村人たちから「神として崇められていた」と説明され、貢ぎ物を捧げられており、背後にはトーテムポールが立っていた⁸⁾。オーストラリアを扱った19世紀後期までのヨーロッパの本の挿絵には、実際にこの土地を踏んだこともない画家により描かれたものがほとんどであったため、誇張をとめないながらも自然と動物は美しく、時には「デフォルメ」されており、アボリジニは当初から戯画化され描かれていた。20世紀前半の少年少女向けのターナーやブルースの挿絵は、当然ながら、イギリス人読者の関心に的を絞ったヴィクトリア朝の風俗そのものであり、背景もオーストラリア的なものはほとんど何もなかった。オーストラリアの児童向け作品には、動物と人間が同化した主人公が活躍する物語も見られ、それらはこの別世界に住んでいて当然と見なされているし、子どもたちからも

愛される存在となっている。これらが欧米、特にアメリカの挿絵画家の影響から近代的なものに変わってきたのは、第二次世界大戦後のことであった。イーダ・レントゥル・オースワイト (Ida Rentoul Outhwaite, 1888-1960) やディック・ラフゼイ (Dick Roughsey, 1924-1985) の絵は、幻想的な民話や伝説の挿絵として、新たな領域を開拓していた。大陸の奥地までが開拓された現在、さらには各国からの移民によりさまざまな風俗が輸入されている現在、挿絵画家の表現も多彩になっており、今後さらなる様式と題材とがこの新天地で見られることになる。

オーストラリア児童文学は、さらにいくつかの挑戦にさらされている。まず、第一に、白豪主義を起点とする保守性がある。第一次世界大戦以前のイギリスを手本とした児童文学には、その物語にも挿絵にも特定の人種を優越した証左が歴然であり、その社会では当然とされていた。第二次世界大戦での勝利はまた、この思想に拍車をかけていた。若者向けの小説には、そうした思想が随所に示されていた。しかし、世界各地からの移民が押し寄せ、経済の活況を支えるために政府がそれを歓迎する時代を迎え、新たに市民となったアジアや中近東からの移民たちは、こうした傾向の小説を子どもたちに読ませたいとは思えない。白豪主義の思想は折りを見て支持されうるし、文章、すなわち文学に表現しやすい思想となる。もちろん、差別のない平等が建前ではあるが、保守的な思想は自然のなかでの若者の勇気を称賛する描写などにも表れてくる。アメリカの若者の脱社会の傾向は、すでに1951年の『キャッチャー・イン・ザ・ライ (The Catcher in the Rye)』に表現されていたが、オーストラリアではこの作品は1957年まで検閲の対象となっていた⁹⁾。保守的な社会への若者の不安の認識と反抗は、1960年代半ばのサウスオールによりようやく表現されるようになった。

さらに重要なのは、先住民のアボリジニに対する態度であろう。初期の文学作品のころから

彼らは軽視されてきた。自然に立ち向かう若者の冒険にあってすら、彼ら是对等の仲間ではなかった。その後ようやく、彼らに対するまなざしに変化が見られ、彼らの生活を描いたり、彼らを主人公として扱う小説も読めるようになった。オーストラリアの辺境の地が取りあげられるようになったのも、そこに住む先住民との交流があって初めて描きうるものであった。消滅したタスマニアの先住民の悲劇を描いたのは1960年代も末であったが、1980年代以降に、砂漠や岩山の地に住みついた人たち側からの記録が出現するようになってきた。太平洋やインド洋の島なども観光地ではなく、生活の場として取りあげられるようになり、オーストラリアの「土地の精神」が文学に表現されるようになってきている。

オーストラリア生まれであったが、両親の影響でアイルランドの伝説とイギリスの家庭小説を好んだ『メアリー・ポピンズ』の作者パメラ・トラヴァース (Pamela Travers, 1899-1996) は、1923年、17歳でクイーンズランドを去り、イギリスに移住したが、オーストラリアには「ファンタジー」の伝統がないと感じていた。アボリジニに伝わる古来からの豊かな伝説が文学として発見されたのは、それより40年以上も後のことである。第二次世界大戦以降に生まれた世代は、オーストラリアの「ファンタジー」を生み出す作業に取り組んでおり、その一人にギリアン・ルービンシテイン (Gillian Rubinstein, 1942-) がいる。ルービンシテインは、イングランド生まれで、オックスフォードを出て、ロンドン大学で教えた後、結婚してオーストラリアに移住し作家となっていたが、オーストラリアに新天地を求めたのは、両親の不仲と離婚に苦しんだ結果であった。このようにオーストラリアでは古い型の文学を書き換えるため、新たな作家が生まれ、現在に至るも新たな挑戦が続けている。

第二次世界大戦より前までは、イギリスの出版社主導によるイギリス文学の垂流に近いものであり、推理小説とSFは少なく、児童文学に関

しては、やはりイギリスの「後を追って」いた。戦後になると世界からの移民の流入により、多彩な才能がオーストラリアに出現していた。児童文学の領域で今後さらなる発展がみられるであろう。

VI おわりに

以上に見てきたとおり、オーストラリアの児童文学作品は、この国の社会の変遷を如実に反映していた。それは「意識の流れ」といった「純文学」による人間心理の深奥への探究ではないだけに、成人向けの文学よりもはっきりと社会と自然環境に対峙して存在していた。その意味で、児童文学は「アナル学派」の言う文化現象の「社会史」的分析¹⁰⁾に向いており、特にオーストラリアの場合にはその意味合いが鮮明であった。こういった意味で、オーストラリア児童文学の行方は、今後も追求し研究するに値する。さらに、他の諸国の児童作品もこうした視点から取りあげることが望まれる。

注・引用文献

- 1) ボール・アザール, 矢崎源九郎, 横山正矢訳『本・子ども・大人』紀伊國屋書店, 1957年, 188ページ。
- 2) Niall, Brenda, *Australia through the Looking-Glass: Children's Fiction 1830-1980*, Melbourne: Melbourne University Press, 1988, p.22.
- 3) Niall, Brenda, *Seven Little Billabongs: The World of Ethel Turner and Mary Grant Bruce*, Melbourne: Melbourne University Press, 1979, pp.201-204.
- 4) 桂宥子, 牟田おりえ『はじめて学ぶ英米児童文学史』ミネルヴァ書房, 2004年, 89-90ページ。
- 5) Herald, 16, November 1958, p.2, cited in Niall, Brenda, *Seven Little Billabongs: The World of Ethel Turner and Mary Grant Bruce*, Melbourne: Melbourne University Press, 1979, p.25.
- 6) Niall, Brenda, (1988), *op.cit.*, p.319.
- 7) *Ibid.*, pp.319-320.
- 8) Muir, Marcie, *A History of Australian Childrens Book Illustration*, Melbourne: Oxford University Press, 1982, p.9.
- 9) Niall, Brenda, "Children's Literature", *New*

Literary History of Australia, Victoria: Penguin Books, 1988, p.550.

- 10) 竹岡敬温『「アナル」学派と社会史:「新しい歴史」へ向かって』同文館, 1990年, 248-270ページ。

参考文献

- Lees, Stella, Pam, Macintyre, *The Oxford Companion to Australian Children's Literature*, Melbourne: Oxford University Press, 1993, 485p.
- Muir, Marcie, *A History of Australian Childrens Book Illustration*, Melbourne: Oxford University Press: Melbourne, 1982, 160p.
- Niall, Brenda, *Australia through the Looking-Glass: Children's Fiction 1830-1980*, Melbourne: Melbourne University Press, 1987, 358p.
- Niall, Brenda, "Children's Literature", *New Literary History of Australia*, Victoria: Penguin Books, 1988, pp.547-559.
- Saxby, H. M., *A History of Australian Children's Literature 1841-1941*, Sydney: Wentworth Books, 1969, 212p.
- Saxby, H. M., *A History of Australian Children's Literature 1941-1970*, Sydney: Wentworth Books, 1971, 316p.

小池直子「オーストラリア初期児童文学」『北海学園大学学術論集』第103号, 2000年3月, 11-22ページ。

牟田おりえ『ブッシュに消えた子どもたち: オーストラリア児童文学』中教出版, 1989年, 総249ページ。

百々佑利子「オーストラリア児童文学の現在」『オーストラリア研究紀要』第14号, 1988年12月, 19-39ページ。

ロビン・シーハン・ブライト「オーストラリア先住民の児童書出版」『ブックバード日本版』No.7, 2011年, 4-16ページ。

その他, Gale社の*Something About the Author*などの人物情報も参考にした。本文で使った邦題については『はじめて学ぶ英米児童文学史』『ブッシュに消えた子どもたち』他を参考に付記した。

(2022年7月15日掲載決定)